



# 文理学部キャンパスマップ



受付	百年記念館 1階	入口
メイン会場	百年記念館 2階	国際会議場
ワークショップ会場	百年記念館 1階	多目的ホール
休憩室	百年記念館 2階	第1会議室
理事会会場	百年記念館 2階	第3会議室
講師・スタッフ控え室	百年記念館 2階	第4会議室
懇親会会場	カフェテリアチェリー	
	(キャンパス正門入って左手の食堂)	

## 第8回学術大会 大会長挨拶

合田秀行（大会長・日本大学）

本年度は、日本大学文理学部にて学術大会を開催することになりました。開催に向けて、一言ご挨拶を申し上げます。私自身は、本学部でも哲学研究室に所属しており、所謂インド学・仏教学を専攻していますが、トランスパーソナル心理学との出会いは古く、それは我が恩師である故・玉城康四郎先生の影響によるところが大きいと言えます。先生は、1985年に京都で開催された第9回トランスパーソナル国際会議において提題者として指名され、発表しておられます。その意味でも、今回の学術大会のお話を頂いたときは、やはり恩師のことが脳裡を過ぎりました。また、今回の大会テーマである「東西思想の根源にあるもの」も、恩師が終生、探求していた問題意識を念頭において設定いたしました。そのよう経緯もあり、講演・シンポジウムのテーマも、偏っているとのことご批判を頂戴するかもしれませんが、トランスパーソナル心理学の重要な原点でもあると考えています。何卒、ご理解頂きたく存じます。

特別講演では、大峯千回峰行という修験道の荒行を満行された塩沼亮潤阿闍梨をお招きします。極限の世界を通しての貴重なご体験を拝聴できますことを楽しみにしております。また、本会の顧問であり、かねてよりご高説を拝聴したく切望しておりました恩田彰先生に、快諾を頂きました。いずれの講演も、現代人に大きな気づきを与える内容であると確信しております。さらに、特別シンポジウムでは、諸宗教に対して根源的な視座から研究を展開し、発言しておられる三人のシンポジストをお招きし、まさに大会テーマをめぐって討論して頂きたく企画しました。

なお、ワークショップにつきましては、本学部の平日における慢性的な教室不足という現状もあり、土・日以外の曜日に会場を確保することが難しいため、研究発表との同時開催といたしました。皆様には、何かとご不便をお掛けしますが、ご了承下さい。最後に、本大会が、参加者の皆様にとって有意義なものとなることを心から願ってやみません。

### [事務局から]

#### ・学術大会当日緊急連絡先

080-3498-4839（百周年記念館・事務室に繋がりますので、大会スタッフを呼び出して下さい。）

#### ・JATP 第8回大会事務局・問い合わせ先

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部哲学研究室内

F A X 03-5317-9217

E メール jatp08@chs.nihon-u.ac.jp

学会HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jatp>

#### ・参加費の振込先

参加費は下記の口座にお振込みください。なお、参加費（予約）は、大会前日までにお振込みいただいた場合に限りです。なお、直前に振込まれた場合には、入金の確認をできない場合もありますので、お手数ですが、振込明細書をご持参下さい。専属の事務スタッフはいませんので、できるかぎり、早めのお振込みにご協力下さいますようお願いいたします。

振込み先：JATP 第8回大会事務局 合田秀行（ゴウダヒデユキ）

銀行口座：三井住友銀行 下高井戸支店（普）**3746596**

\*会費一覧表については、次ページをご覧ください。

		学術・一般会員	非会員	学生会員・学生
学術大会2日通し (含ワークショップ1回分費用)	予約	6000円	7000円	4000円
	当日	7000円	8000円	5000円
懇親会 (10日夜)	予約	4000円	4000円	3000円
	当日	5000円	5000円	4000円
ワークショップのみ(1回分) (10日または11日)	予約	5000円	7000円	3000円
	当日	7000円	9000円	5000円

#### ・大会当日の受付について

百周年記念館の入口付近に受付を設けます。ご来場いただきましたら、はじめに受付にお立ち寄りください。また、当日の参加も大歓迎です。参加費は、上の一覧表をご参照下さい。なお、クローク等はございませんので、お荷物は各自で管理をお願いいたします。

#### ・懇親会の受付について

10日夜の懇親会の受付は、開始直前まで受け付けます。より多くの方の参加をお待ちしております。すでに欠席で申込書を頂いていても、変更可能ですので、ご検討下さい。

#### ・ワークショップの受付について

今回は諸般の事情により、ワークショップは研究発表と同時開催になります。両日のワークショップともに、定員は設けられていません。当日の参加も受け付けます。なお、「ハワイアン・カフナ・サイエンス」については、参加者の方々への伝達事項がありますので、プログラム10ページをご覧ください。

#### ・書籍販売コーナーについて

書籍販売コーナー（本学会関連書・春秋社他）を設けます。また、販売する書籍をお持ちの方は、あらかじめ事務局まで書籍を郵送または御持参下さい。

#### ・お食事について

10日(土)については、キャンパス内の学生食堂や売店・自動販売機をご利用いただけます。また、下高井戸駅・桜上水駅周辺の商店街に、食事のできるお店やコンビニ等がたくさんございますので、そちらもご利用下さい。原則的に、百周年記念館内での食事は禁止されております。

#### ・ご休憩について

国際会議場の隣にある会議室1を参加者の休憩用に開放しますので、自由にご利用下さい。飲み物については、自動販売機をご利用下さい。なお、日曜日は正門が閉まっているため、キャンパス内の自

動販売機は利用できませんので、ご了承下さい。

・禁煙について

キャンパス内は、分煙措置が取られており、百周年記念館内は全面禁煙となっています。入口を出たところが喫煙場所と指定されていますので、そちらをご利用下さい。

・宿泊について

会場の日本大学文理学部は、新宿駅より京王線で約10分、最寄り駅から徒歩約8分（プログラム1ページ参照）です。宿泊については、各自でご予約下さいますようお願いいたします。

・講師、シンポジストの先生方へ

講師控え室（会議室4）をご用意しておりますので、受付のスタッフに声をおかけ下さい。

・発表等でパソコンを使用される先生へ

パソコンを利用される方は各自ご持参下さい。パソコンの動作確認は、研究発表開始以前か、休憩時間をお願いいたします。他の機材を必要とする方は、予め事務局にご連絡下さい。

・配布物の印刷について

研究発表される先生、講演・シンポジウムの講師の先生で、当日、配布物を予定されている方は、特に締切日は設けませんが、数日前までに、事務局宛に原稿あるいはデータ（word文書）をお送り下さい。当日は、限られたスタッフで学術大会を運営しますので、事前に原稿を頂けない場合には、恐れ入りますが、各自でご用意いただきたくお願いいたします。研究発表の場合は、50部程度ご用意下さい。何卒、御協力の程、宜しくお願いいたします。

・その他

その他ご不明の点がありましたら、「日本大学文理学部」の腕章をつけた大会スタッフまでお気軽に声をおかけ下さい。

# プログラム

## 11月10日（土）学術大会1日目

メイン会場：百周年記念館2階 / 国際会議場

- 9:00 受付開始（百周年記念館1階入口）
- 9:30～14:00 ワークショップ「ハワイアン・カフナ・サイエンス」（多目的ホール）  
講師 守谷京子（I.P.G. 所長、カフナ・サイエンス協会ジャパン会長）
- 9:55～10:00 開会挨拶 合田秀行（大会長・日本大学）
- 10:00～12:45 個人研究発表（発表時間は質疑応答を含めて各30分）  
（10:00～11:30）座長 中村雅彦（愛媛大学）
- 1 高等教育におけるエネルギーヨガ（ワンネスディクシャ）体験前後の気分変化について  
— POMS と自由記述法を用いて—  
巻口勇一郎（常葉学園短期大学）
  - 2 福祉学分野から考察するトランスパーソナル心理学 / 精神医学の活用とその展望  
— 「自己覚知」(self-awareness) と「禅」の概念を中心として—  
大津雅之（同志社大学大学院）
  - 3 仏説『大縁方便経・因縁経』— 識・エネルギーの流れについて—  
鄭貴霞・法恵（真言宗尼僧）  
休憩（11:30-11:45）  
（11:45～12:45）座長 石川勇一（相模女子大学）
  - 4 精神科におけるヨガ療法の理論的フレームワーク  
堀内健太郎（国立精神・神経センター）
  - 5 心身相関およびアイデンティティーの拡大に関する一考察  
吉村哲明（花園大学）
- 12:45～13:15 理事会（会場：百周年記念館2階 第3会議室）
- 14:30～16:00 特別講演 第1部  
「心を込めて生きること」  
講師 塩沼亮潤（慈眼寺住職）  
司会 合田秀行（日本大学）
- 16:15～17:45 特別講演 第2部  
「禅の悟りの心理と創造性」  
講師 恩田 彰（東洋大学名誉教授）  
司会 安藤 治（花園大学）
- 18:00～20:00 懇親会（会場：カフェテリアチェリー）  
\*百周年記念館を出て道路を渡り、正門を入れて左手の建物の1階

# 11月11日（日）学術大会2日目

メイン会場：百周年記念館2階 / 国際会議場

- 9:00 受付開始（百周年記念館1階入口）
- 9:30～14:00 ワークショップ「スピリチュアル・ファミリー・コンステレーション」  
（多目的ホール） 講師 谷口隆一郎（聖学院大学）
- 9:30～12:45 個人研究発表（発表時間は質疑応答を含めて各30分）  
（9:30～11:00）座長 松本 孚（相模女子大学）
- 6 心霊治療という現象に関する一考察  
朽原篤（京都文教大学大学院）
- 7 スピリチュアルヘルスとSOC（首尾一貫感覚）・本来感・フロー概念との関連  
尾崎真奈美（京都大学大学院）
- 8 自死遺族への心理的援助におけるスピリチュアルアプローチの必然性  
吉野淳一（札幌医科大学）  
休憩（11:00-11:15）  
（11:15～12:45）座長 中川吉晴（立命館大学）
- 9 <sup>セラピューティック・ミュージック・ムーヴメント</sup>アメリカの療法音楽活動における癒しの概念  
— The Chalice of Repose Project の養成プログラムを中心として—  
里村生英（エリザベト音楽大学）
- 10 がん患者のスピリチュアルペインの変容過程—心理的支えとの関連から—  
○小柳由美子（愛媛大学大学院）・中村雅彦（愛媛大学）
- 11 二つのスピリチュアリティとその政治的含意—気づきとつながり  
堀江宗正（聖心女子大学）

14:00～14:30 総会

14:30～17:00 特別シンポジウム 「東西思想の根源にあるもの」

シンポジスト 仏教とキリスト教

W. ジョンストン（上智大学名誉教授・イエズス会司祭）

空海・プロティノス・エックハルトに見る自己変容の道

小田川方子（麗澤大学名誉教授）

祈りから見た人間存在—「無限と有限の関係」として—

棚次正和（京都府立医科大学教授）

司会 合田秀行（日本大学）

17:00 閉会の挨拶 合田秀行（大会長・日本大学）

※研究発表でパソコンなどを使用する方へのお知らせ

PC動作確認時間帯：研究発表開始以前か、休憩時間をお願いします。

PCを利用される方は各自ご持参下さい。他の機材を必要とする方は、予め事務局にご連絡下さい。

## ワークショップ

9:00 ワークショップ受付開始

9:30~14:00 ワークショップ (百周年記念館1階多目的ホール)

\*いずれのワークショップも定員は設けておりませんので、当日参加も受け付けています。

10日(土)

「ハワイアン・カフナ・サイエンス」

講師:守谷京子(I.P.G.所長、カフナ・サイエンス協会ジャパン会長、日本ゲシュタルト療法研究会世話人)

「カフナ・サイエンスR」は、現代の心理療法「ゲシュタルトセラピー」をいしずえとした理論と、古代ハワイ「カフナ」の伝統的智慧が統合され創られた心身の健康をはかるホリスティックなセラピーです。グループの中で個人ワーク、グループダイナミックがなされます。

人間は、自分と他者に対し調和し責任をとって初めて進化があり、それこそが個人と種の生存を可能にするとパールズは強調しました。

まさに、ハワイの「アロハ」の精神は、共に息を共有し、自他共に尊厳を持ち理解し責任をとっていきいこうというものです。

「カフナ」とは、「隠された聖なる秘伝を保持し管理する人」のことを言い、実践者であり指導者です。カフナは、トレーニングを積み、万能に秀で、また、特定の分野で精神的、肉体的訓練を受けた達人、マナ(気)と智慧を管理し伝えていく専門家をさします。「カフナ」になるトレーニングでは、自分自身が何者であるかに気づき、知性と共に、直感や、感じることを内面で味わうことなどの感性を持ち合わせいる鍛錬をします。自己に目覚め、成長のプロセスや技術を達成し、自分自身に軸のあるマスターになるトレーニングを積み「カフナ」になります。

ゲシュタルトセラピーは、「右脳療法」と呼ぶ研究者もいます。ノン・バーバル(非言語的な言語)、つまり顔や体での表現や芸術的な表現と同様に、直感的で統合的な機能を回復させます。まさに、「カフナ・サイエンスR」で行うことは「右脳のトレーニング」です。

「カフナ・サイエンスR」では、カフナになるための基礎トレーニングのメソッドを用い、最終的にはいろいろな意味での自己実現を目指します。具体的には、「フライング(古代フラの原型の踊りと食事法)」、「エントランス(自分への気づき)」、「カフナR・ロミ(ボディワーク)」、「フリ・ホヌア(環境とエネルギーの流れの関係性)」、「ホオポノポノ(コミュニケーションの取り方)」、「チャント(自己実現の方法)」などのツールを通し、グループの中で個人ワーク、グループダイナミックがなされます。

フラダンスは、もともと鳥(魂)の気づきを踊りにして、自然とコンタクトをとるものです。フラダンスの原型とも言える「フライング」は、踊りながら「今ここで」一瞬一瞬の自分自身、環境に気づいてゆきます。

「フライング」「エントランス(自分への気づき)」「カフナR・ロミ(ボディワーク)」「ホオポノポノ(コミュニケーションの取り方)」では、ゲシュタルトセラピーの基本概念、「今、ここ」、「プロセス」、「アウェアネス(気づき)」、「フィールドとシステム」、「創造的な調整」、「アンフィニッシュ・ビジネス(未完了の問題)」、「抵抗」、「ホメオスタシス」、「レスポンシビリティ(責任)」、「実験」、「個人の独創性に対する権利」、「共感の態度」、「人間への全体論的アプローチ」、「相補的な両極性」、「感情と身体の間連性」、「攻撃性」、「創造力と想像力」、「グループの中での個人」などの理論が反映されています。このツールを活用し、ゲシュタルトセラピーの基本概念によって個人ワークに導きます。

ゲシュタルトセラピーは、世界的にはますます多様に用いられるようになり、効果に疑問を持つ人は殆どありません。でも、どの様に作用するのでしょうか?深く、急速に、しかも継続する期間にわたって、実際に人々がどう変化できるのでしょうか?長い間、私たちは態度や行動の変化を — 時には驚く



ほど劇的に — 観察するだけで、どんな過程をたどるのか説明されることなく行われていました。

今日、最近の神経科学の研究により、現在の脳の現象についてもっと良く理解できるようになりました。事実、あらゆる学習体験や心理療法の介入は、大脳の回路構成に直接に働いています。こうした脳内部の生化学は、ホルモンの生成や神経伝達物質（ドーパミン、セロトニン、アドレナリン、テストステロンなど）のように働きます。このことは、身体と感情を密接に結びつける、ゲシュタルトセラピーのような心理療法について特にいえることが、欧米のゲシュタルトセラピーの研究者により論じられております。

2007年2月にアメリカのエサレン研究所で開かれたゲシュタルトセラピーのカンファレンスでも、テーマとして、心理療法は、実は化学療法の形態であると認識するということが話されました。神経生理学的、生化学的な変化は心理療法で起こります。

「カフナ・サイエンスR」の「フライング」「カフナR・ロミ」では、より一層体からアプローチし、脳内部の生化学を促します。へその少し下、下腹の内部に、気力が集まるとされる「丹田」と呼ばれているところがあります。丹田や腰を、踊りで動かすことにより子宮に刺激が行き、その刺激は視床下部に伝達され感情と関与してゆきます。

個々のホルモン・レベルにおいて、毎回の食事、そしてどの感情もバランスに影響を及ぼします。それでは、ゲシュタルト・セラピーのセッション中に、体の生理システムと行動と感情との関係により、何が起きるのでしょうか？

ゲシュタルトセラピーは、視床下部のゾーン（今、ここでの明確なニーズ）と前頭葉（統合的で全体的アプローチ、そして責任と意思決定）を特に刺激します。若さと活力の維持するためにこうして、ゲシュタルトはこれらのもろく繊細なゾーンを活動的に保ちます。

生命の6つの基本的感情（喜び、悲しみ、怒り、愛、欲望、恐怖）に、脳辺縁系システムの複雑な構造にゆだねられています。また、大脳辺縁系システムの複雑な構造は、感情と同じく記憶についても関与しています。

経験とは、十分に感情が動かされない限り、記憶には残りません。

コピー機は、同じように、使用する前に暖められる必要があります。私たちは無関心の時より、喜びや願望、恐怖を感じているときのほうが、より広範囲のことを学んでいます。ゲシュタルトセラピーではクライアントの深い感情的な反応を刺激することをめざしています。そのことで、分子構造の修正がなされ、行われたワークが永久に「経験によって起こる神経系の構造変化によって」記録されます。

ゲシュタルトセラピーセッション中も、脳では新しい回路を作っています。

遺伝子の相続のオリジナルな原本は、各自の経験と私たちの存在そのものの独自の重要な事件により、毎日再調整されています。つまり、これが、ゲシュタルトが確信しているクリエイティブな調整です。この仕事は、夜に部分的に無意識に起きるのですが、昼の間に準備され継続されています。自分自身の体験を人生の計画に統合することによって、自分自身の「プログラム」を最新情報に書き換えることは、ゲシュタルト・セラピーの目的のひとつです。

体も記憶を覚えて、その人の人生を反映した形で人相ならぬ大層を形成しています。「フライング」「カフナR・ロミ」は、細胞がもっとも活性化する温度の中で踊られ、よりバランスのとれた体調に調整されます。

神経伝達物質は両極の一对が働きます。（典型的なゲシュタルト・テーマである両極性と同様です）。例えば、ドーパミンは「気づき、コンタクト、欲求のホルモン」ですが、刺激性の強壮効果があります。そして、「実現、組織化、気分調整のホルモン」であるセロトニンの組織化の効果である沈静によって対抗されます。

それぞれのゲシュタルト心理治療の活動は、これらの異なる体内生成物の自然な均衡に貢献します。「フライング」「カフナR・ロミ」では、心と共に体からもアプローチしています。

ゲシュタルトセラピー（そしてリバーシング、バイオエネジェティック/生体エネルギー法、プライマリーセラピーなど）の様に体や感情のワークに関わったセラピーのアプローチは、後に続く言語表現のためにたくさんのスペースを提供する精神分析、交流分析、またはNLP/神経言語学的プログラミングのような言語を対象としたアプローチよりもっと二つの脳半球と関わっています。ゲシュタ

ルト等のセラピーは、従来の伝統的なセラピーでは言葉による表現をもっと優先させるのに対し、または感情を誘導するのに反して、身体と感情の動きが先になり、様々なことが生じてくるのです。

「フライング」「カフナR・ロミ」は、そのゲシュタルトセラピーのアプローチを身体を通し、より身体と感情の動きを促進させていくより強力なアプローチです。

「カフナ・サイエンスR」は、「今、ここ」に生き、物の本質を見出し実行し、自己変容していく点で「ゲシュタルトセラピー」と共通性があります。トレーニングを積み目覚めた者(奥義を伝授された者)は、調和と均衡の法則に気づくようになります。なお自分と環境に目覚めていけば自己中心にならず、調和と均衡の法則をどのように扱っていけばよいか、自ら気がついていけるようになっていきます。

「カフナ・サイエンスR」は、心理、身体、精神、技術の4つの面をサポートします。

【心理面】 摂食障害・幼児虐待・依存症・心理増強など

【身体面】 婦人科疾患(PMS, 更年期障害、生理不順など)・成人病の緩和・ダイエット・健康維持・武道のスキルアップ・アスリートのスキルアップなど

【精神面】 アーティストの創造性増進・サラリーマンのモチベーション増強・人生のやる気向上・心の安寧・精神性の向上など

【技術面】 ボディワーカー養成・専門家の直感力・精神性の鍛錬など

「カフナ・サイエンスR」では、人間性を取り戻すべく、古代ハワイの伝統的智慧とゲシュタルトセラピーを中心とした現代のサイコセラピーとの統合で生まれたセラピーです。

【ワークショップ参加者への伝達事項】

服装: スカート以外の動きやすい服

持参してくるもの: タオル、飲料水(甘くないもの)

11日(日)

「スピリチュアル・ファミリー・コンステレーション: 家族の命に宿る癒しの力」

講師: 谷口隆一郎(聖学院大学准教授、ファミリー・コンステレーション プラクティショナー/NLP トレーナー)

講師プロフィール: 1960年代に鹿児島県に生まれる。哲学者・倫理学者。エリクソニアン・アプローチ、NLP(ニューコード)、ファミリー・コンステレーションを主な手法としている心理カウンセラー。ジョン・グリンダー博士&カルメン・ボスティック女史認定NLPトレーナー。これらの手法を、主に、大学生の教育・コーチング、そして一般の方を対象とした心理カウンセリングに適用している。また、NLPの下敷きとなっているシステムック哲学ないしプロセス志向の哲学の研究を行っている。1987年、アメリカの社会科学系大学院を卒業。その後、カナダの哲学研究機関へ。研究生生活を送る一方で、身体技法(新体道)を教えたり、カウンセラーなどの仕事に携わる。1996年帰国。1999年、アムステルダム自由大学大学院哲学部から哲学博士号(Ph.D.)を授かる。

所属学会: 日本交渉学会、国連 NGO Global Common Society、日本哲学会、日本カウンセリング学会、日本トランスパーソナル心理学/精神医学会、他。

ファミリー・コンステレーションは、家系的に起こる原因不明の心身の病気、不慮の事故、自殺企図、霊的危機、家族との関係、パートナーとの関係(恋愛問題)、仕事上の人間関係の問題を、クライアントの原家族と前世代の家族との運命において生じる魂(命の連鎖)のもつれを明るみに出し紐解くことで、クライアントが家族布置の新たなイメージを持って前進して生きていくのを助けます。参加者は、自分の問題、自分の家族の問題、友人の問題、クライアントの問題に対してワークを受けることができます。

# 抄 録 集

11月10日（土） 研究発表

## 【研究発表1】

高等教育におけるエネルギーヨガ（ワネスディクシャ）体験前後の気分変化について  
— POMS と自由記述法を用いて—

巻口勇一郎（常葉学園短期大学）

筆者の本務校は仏教教育を長年の伝統としている。具体的には、座禅を全学必修プログラムとして取り入れてきた。そうした経緯で、座禅以外にも瞑想やヨガなどの東洋的身体技法を学内で実践することには理解がある。本発表では、昨年度および本年10月に、大学生、短大生、専門学校生ら百名程度を対象に、インドのワネスディクシャというエネルギー伝授と座禅、ヨガとを組み合わせたものを1、ないし2回体験させ、体験前後での意識変化の有無や体験内容をPOMSや自由記述法を用いて明らかにする。ワネスディクシャとは、ファシリテーターが頭頂部を10秒程度軽くマッサージすると、頭頂部のチャクラから大宇宙のエネルギーが入り込んできて、それを観想したり一体となる（というイメージを伴う）インド式ヘッドマッサージないし瞑想法である。体験前と体験後でPOMSを実施し、不安や活発さなど各因子における合計得点の変化の有無を検証する。ただ、こうした尺度における調査のみでは体験の個性が残渣成分として排除される。主観的動機や意味（物語）は本人にとって強い印象を形成しその後の人生における大きな原動力となることから、本研究では、尺度のみで体験を捉え平板化してしまうことのないよう、体験がそれぞれ各自にどのような意味として浮上したのかを自由記述法からも明らかにしたい。なお、以上はこれから実施する研究であり、実施状況によっては研究の途中経過報告になる。教育における癒しや身体技法展開の可能性や方法といった基本的なことを含めアドバイスをいただければ幸いである。

## 【研究発表2】

身福祉学分野から考察するトランスパーソナル心理学 / 精神医学の活用とその展望  
— 「自己覚知」(self-awareness) と「禅」の概念を中心として—

大津雅之（同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻  
ヒューマン・セキュリティ研究コース博士課程（後期課程））

今日、福祉分野では、家族や専門職者として福祉的な援助（介護）活動を展開する過程における「援助する側」の精神的諸問題に関心が集まっている。バーンアウト（燃え尽き症候群）・虐待・年離れた夫婦が一方の家庭内介護を担ういわゆる「老老介護」の過程で起きる心中事件等、マスコミでも数多く取り上げられている。しかし、福祉専門職者に対するバーンアウトの調査結果を見てみると、精神的諸問題の要因は、福祉の仕事・行為そのものではなく、それ以外の様々な事柄を要因とする結果を見ることもできる。たしかに、最初は、誰もが福祉とは正反対の行為にシフトする自分など想定さ

えしないことであろう。しかし、「エートス」という道徳的力動が根底に渦巻く実践の過程において、自らを見つめることすら忘れ、その力動に飲み込まれ、誤った方向性や実践とは関係のない問題を保持したまま精神的に病んでしまう様も、時には避け難い現実となるのではないだろうか。このようなことから発表者は「自己をみつめることの大切さ」を考えてきた。

福祉分野においては、援助者自身の内省や内面洞察にあたり、「自己覚知」というすぐれた考え方が存在している。「自己覚知」とは、「社会福祉援助において援助者が、自らの能力、性格、個性を知り、感情、態度を意識的にコントロールすること。」であり、援助者自身が、自らの価値観や感情に左右されないよう、自らを知り、コントロールすることによって、利用者に対する適切な援助を遂行する目的で自らに働きかけるものである。

この考え方は、心理療法にも通ずる部分がある。なかでも、認知行動療法というアプローチは、この「自己覚知」の考え方に大変類似していると言えよう。認知行動療法とは、人間の行動に介在する、出来事と思考の間にある「自動思考」と呼ばれるプロセスの認知的歪みや誤りのセット(スキーマ)を自覚させ、行動変容を踏まえながら症状の軽減に努めようとするアプローチである。

自らを見つめ、自らに気付き、行動変容を踏まえながら自我を再形成させることを目的とする心理療法の考え方は、「自己覚知」の展開にも応用できると考えたい。しかし、心理療法は、被治療者に対する症状の軽減または治癒を前提としている。このため、被治療者以外への応用つまり普遍化を考えることは、それ自体が不適切であることも否めない。さらに、有資格者でない者等が専門的知識を持たないままそれを行うには危険性を伴い問題点も多く、今日の福祉系のテキストにも「自己覚知」を深く行う場合、「心理学関係の有資格者が行うべき」とする注意事項が記載されるようになってきている。

そこで発表者は、「自己覚知」と「心理療法」双方を融合するにあたり、「禅」の応用を考えた次第である。これまでも、心理療法的スキルを一般人に対して活用・普遍化する上で、禅の応用があげられてきていることは周知の通りである。心理療法と禅の考え方に対する類似点をあげ、心理療法的効果を実証させようとする研究が、長い年月を経て発表され蓄積されてきた。古くは1960年にエーリッヒフロムと鈴木大拙が発表した「禅と精神分析」にはじまり、最近では「自己覚知」をキーワードに安藤治らが実証研究による成果を残した上で、展開論を考察している。本発表では、今日の福祉分野で抱えている援助者側の精神的諸問題をふまえ、トランスパーソナル心理学/精神医学の活用とその展望を「自己覚知」と「禅」の概念を通して福祉学分野から考察してみたい。

### 【研究発表3】

#### 仏説『大縁方便経・因縁経』 — 識・エネルギーの流れについて —

鄭貴霞・法恵（真言宗尼僧）

始めに、エネルギーは宇宙空間に素粒子・原子・核子等々とともに充満しており、その種類も三百以上と言われている。今後も継続的に新発見や新たな展開があると思われる。また、天文学と気象学の発達と研究により、現在の気象情報は、比較的正確に報じられて、宇宙空間の気流・エネルギーの資料は整備されつつある。

そして、生物の体内には気のエネルギー・プラーナ・氣息も存在すると考えられ、このプラーナはチャクラを通じて人体に入るとされる。さらに、気功、針灸、経絡などの把脈や効能的な実践と療法

も進んでいる。身体における功用の研究発表も多くあるが、自然科学的に存在を証明するには未だ時間が要ると考えられる。そこで、この発表において、私は仏教の経典によるお釈迦様の教えに沿って、経文の意味を現代的に心理的・精神的な動きとして研究、分析して、宗教の観点によるエネルギーの流れを把握して、皆様の御意見を伺いたい。

まず、『因縁経』における釈尊と阿難の問答による十二因縁の形成と識・エネルギーの流れの作用を心理的に考察する。

次に、『大縁方便経』の業感縁起説における思・行は、生時の習熟・善悪業のエネルギーに刻みつけられて継続することになる。

そして、開発すれば、五蘊となる可能性を具備し、無明の意・エネルギーは父母の和合を縁として胎生となり、有情に実現化した処は初識住であり、「安らか、救い、護り、舎り、灯火、光明、歸処、虚妄なく」と、空間的に身分を形成する業感のエネルギーの相続であると思われる。故に、三界(欲、色、無色界)の説を理解し、生死、貪欲、痴情は、三昧を以て、苦の集因を如実に知見し、智恵を以て煩惱のエネルギーを断ち切るのである。

第三に、縁起より心・エネルギーの流れから八解脱に到るのは、心の解脱と慧の解脱を俱に得ることであり、スピリチュアルな解放に繋がることである。

第四に、死後の運命について、世尊とマハーナーマの問答をもって、死後の情況・肉体の壊死から身心の分離死に致る釈尊の教えが説かれる。

第五に、識には二つの側面がある。①生前に経験習熟より得る認識論と②再生を担う識の機能とである。身体を異にする他世間との因果相続の関係により、前因の修練による識エネルギーの意・習熟の相続性より随伴する極微に従って、このことが形成される。

識における認識の存在は、必ず「その一瞬以前の認識」があり、胎に宿った最初の心識は、一瞬前・存在のエネルギー・識の直後に生じたもので、エネルギーの連鎖相続であって、誕生する際の最初の知識は、それに相応した対象領域があるはずである。それを覚受する機能が未熟なのであり、生後の知識は成長に伴って、学熟して育成することになるのである。

本発表では、以上について考察したい。

#### 【研究発表4】

### 精神科におけるヨーガ療法の理論的フレームワーク

#### Theoretical frameworks for yoga therapy in psychiatry

堀内健太郎 (国立精神・神経センター 精神保健研究所  
社会復帰相談部 協力研究員)

【背景】トランスパーソナル心理学・精神医学の理論的発展は、国内における近年の統合医療の動きに十分活かされていないことが前回大会でも話題となった。しかし、精神科での実践に向けた理論的諸条件が整いつつあるのも事実であり、患者利益の観点からも、各領域に配慮した形での従事者間の説明努力が求められていると思われる。

【目的】国府台病院精神科にてヨーガ療法グループを開始するにあたって必要となった準備を、1) 相補・代替医療、2) ユング心理学、3) 統合失調症の dysintegration 仮説、4) allostasis 理論の観点から理論面、実践面について紹介する。

【方法】1)『Complementary and Alternative Medicine and Psychiatry』(Muskin ら 2000)の翻訳を開始し、特にヨーガ・瞑想と各心理療法との関連について共有を心がけた。2)『黄金の華の秘密』の読み込みや面接トレーニングにて、象徴学的な面接方法とヨーガの関連を検討した。3)統合失調症の現状および、精神科リハビリテーションにおけるリカバリー概念やグループ実施の経験から、ヨーガ療法の対象者を検討した。4)各種慢性疾患の回復と精神医療の関係について検討した。

【結果・考察】1)alternative から complementary への移行には、プライマリケアにおける IM-30(統合医療指向性尺度)や、追加療法としての臨床試験など実践的な知見とともに、行動科学的研究や東西の方法の比較など理論的整理が重要であると考えられた。2)トランスパーソナル学を經由してこそ、神秘学を軸とした各種心身的実践の言語的・社会的側面の重要性が明確になり、また従事者・患者の安全が保証される可能性が考えられた。3)Pigache(1999)の整理するように、注意機能の障害が精神疾患において重要であり、ヨーガにおいて、教示はありつつも、各人が維持できる範囲の姿勢保持を行うことが、適度な注意課題となる可能性が考えられた。回復期の重症精神疾患を持つ人における回復のイメージはナラティブな側面があり、自己表現を安全に喚起する方法が重要と考えられた。4)慢性疾患は現代医学全体の課題でもあり、homeostasis 理論からのパラダイムシフトが見込まれている。精神医療においても、ストレス管理を言語的に図る上で、変化しにくいストレス反応を相対化しうる心身的方法が貢献する可能性が考えられた。これら4つの領域はそれぞれに、今日の精神医療におけるヨーガ等の技法の活用可能性を示唆するものとなっているが、実践上は、副作用への認識の低さ、従事者間の共通言語のなさ、などが課題となるため、説明が努力されるべきであろう。患者に対しても同様であり、平易な教育場面を確保するとともに、治療構造への依存を制御しつつ、就労支援等を含めたモデルを形成することが求められると考えられた。

## 【研究発表5】

### 心身相関およびアイデンティティーの拡大に関する一考察

吉村哲明 (花園大学)

Process Oriented Memory Resolution(POMR)は、個人のアイデンティティーの境界ともいえるエッジを、主としてイメージ技法を用いることによって速やかに解消しうるトランスパーソナル心理療法である。

面接が、主に過去のトラウマ記憶をイメージ技法によって解消する展開となるところから、本法はいわゆる「トラウマ解消法」として着目され、発展してきた経緯をもつ。

しかしながら、近年演者は、トラウマの解消のみならず、トラウマが解消されたのちに立ち現れる「働き」に着目することにより、本法の真の意義が見出されると考えるようになった。

本発表では、自験例を提示しつつ、POMRの実践から経験的に浮かび上がってきたこの「働き」と心身、エッジ、およびアイデンティティーとの関連性を提示する。また、エッジの構成要素、およびその性質についても付言する。

## 特別講演 第1部「心を込めて生きること」

司会 合田秀行（日本大学）

講師 塩沼亮潤（慈眼寺住職）

奈良県吉野山に大峯千日回峰という行がございます。1日48kmの山道を16時間かけまして歩き、年間約120日、9年がかりで行じるといふ世界の中で、春夏秋冬日々全てがうつりゆく縁の中で気づいたことは一体何だったのか。

行とは何か。生きるとは何なのかを暗中模索しながらの日々をふりかえりながら、今、思うことをお話しさせていただきたいと思います。

しかし、行とはいいいましても、三度のご飯にお風呂も布団もありました。ご飯も食べられない人達がおります中で、私のような恵まれた人間が皆様方の前でお話させていただきますこと、大変恐縮致しております。

お会い出来ます日を楽しみに致しております。

【略歴】塩沼亮潤（しおぬま・りょうじゅん）

1968年、仙台市に生まれる。

1987年、東北高校を卒業後、吉野の金峯山寺で出家得度。修行と研鑽の生活に入る。

1991年、大峯百日回峰行満行。

1999年、大峯千日回峰行満行。

2000年、四無行満行。

2006年、八千枚大護摩供満行。

現在、吉野一山・持明院住職。仙台市・慈眼寺住職。大峯千日回峰行大行満大阿闍梨

著書『大峯千日回峰行－修験道の世界』（春秋社）

## 特別講演 第2部「禅の悟りの心理と創造性」

司会 安藤 治（花園大学）

講師 恩田 彰（東洋大学名誉教授）

### 1 禅問答と悟り

禅では、よく師と弟子との間で問答が行われるが、それは相手の見識、境涯を調べたり、相手を悟りに導き、さらに悟りの境涯を深めるために行われるのである。また二人以上のものが、問答によって仏法を明らかに示しかつ深めるのである。

今日の臨済系統の禅では、公案といって禅の問答を弟子に与えるが、禅問答は、一般に一問一答で打ち切れ、問いと答との間には必ずしも直接の論理的な脈絡はない。それというのも、禅問答は、分別判断を断絶させて、直接に仏性すなわち真の自己（真の事実）をつかませようとするからである。

修行者に与えられる公案で、分別知を脱却させる無字、隻手の音声（片手の声をどう聞くか）、父母未生以前の本来の面目（父も母も生まれる前の本来の自己を示せ）というのは、何れも真の自己（真

の事実ともいう)をつかませるために与えられるのである。そこで修行者は、師の指導を受けて、坐禅し、その公案を工夫する。こうして自他の対立した、分別の見方がなくなり、自己と他者が本来一つであることに気づく。すなわち自己および一切の現象は、存在するように見えるけれども、本質的にはその中味は何にもない。しかもその中に無限の働きがあることに気づくのである。これが真の自己(真の事実)の自覚であり、悟りである。

この問答が定型化されたものが公案である。公案は、禅者の悟りの機縁や言行を短い文章で表現したもので、修行者が自ら則っていく行動基準となり、また師が弟子に問題として与え、それを参究させて悟りへ導く方法として用いられるようになったのである。

## 2 禅機

禅においては、自己と他者が一つになった三昧を体験し、そこに自己がないことに気づく。そして他者もないことに気づく。そこで自他一如の無相の自己が働き出てくるのである。そうすると、その人の行動はより自由に、生き生きとして、創造的に行動しうようになる。そのような禅者の行動に見られる働きを禅機というのである。禅者が直観的に洞察し、また意識的または無意識的に行動したことが、その状況にぴったりと適合し、当面した問題を解決してしまうのである。その働きが禅機であって、禅者によってその人独自の言行が示される。その意味で禅者の行動は、日常ではごく自然であるけれども、新しい状況や問題場面では、その困難を克服し、うまく適応し、葛藤を断ち切って問題を解決していくのである。その点独創的であり、個性的である。

禅では、仏法すなわち真の自己(真の事実)をとらえることが大切であるが、真の自己そのものを「体」といい、それが現われる特質・状態を「相」といい、その働きを「用」(ゆう)といっている。禅機というのは、この用のことを示しており、創造性(creativity)は、この用に関係している。

## 3 禅の悟りの心理と創造性

禅の本質は、直指人心、見性成仏である。要するに己事究明すなわち真の自己を究明することである。悟りとは、仏性すなわち真の自己(真の事実)を徹見することである。すべての存在は自己のものではない。自己がないことすなわち無我に気がつくこと、すべての存在が自己であることがわかるのである。そこに自他不二、主客一如の真の自己(真の事実)が現われるのである。

真の自己は、有分別智、すなわちすべての事情を対象化して、それについて理論的に思考することではとらえることはできない。しかし無分別智、すなわち自己と対象が一体化した時に気づくのである。そこで真の自己は、一般に観念や概念としてとらえることはできないし、また言語やイメージによっても表現することが難しい。悟るということは、有分別智から離れて無分別智を得ることである。しかしいったん無分別智が得られ、その後には有分別智にもどるとこれを後得智(無分別後智)というが、この後得智では、かなり自由につかみ、これを表現することができる。すなわち観念、概念、思想としてどのようにもとらえることができ、また言語やイメージで自由に表現することができるのである。有分別智は論理的思考、無分別智は直観(直観的思考)に相当すると見ると、無分別智→有分別智すなわち後得智の過程は、直観的思考→論理的思考すなわち両方の働きの統合と発展による創造的思考の過程に対応している。そこで後得智には、創造性の特徴が見られるのである。

真の自己は、空間的にはここにおいて宇宙大に広がり、時間的には無限の過去と無限の未来を含む今において、永遠に生きどおしに生きている。すなわち不生不滅であり、全く変らない。これに気づくと、安心が得られる。そして、安心が得られると、人間は自由に創造的に行動することができるようになるのである。



次に禅の悟りに見られる創造性の特徴を取り上げて考察しよう。(1) 至高体験 (2) 自己の探求 (3) 自発性 (4) 真の事実の発見 (5) 公開の秘密 (6) 死と再生 (7) 問題解決とネーミング (名づけ) (8) 柔軟性 (9) 窮地の打開 (10) 自他一如と直観

【略歴】 恩田彰 (おんだ・あきら) 東京大学文学部心理学科卒業。東洋大学文学部教授を経て、現在東洋大学名誉教授。文学博士。日本トランスパーソナル心理学 / 精神医学会顧問、日本創造学会名誉会長、日本心理臨床学会名誉会員、日本催眠医学心理学会名誉会員。著書『創造性の研究』『創造心理学』『創造性開発の研究』『創造性教育の展開』『禅と創造性』『仏教の心理と創造性』(いずれも恒星社厚生閣)。編著『東洋と知恵と心理学』(大日本図書)。共編著『臨床心理学辞典』(八千代出版)ほか多数。

## 11月11日(日) 研究発表

### 【研究発表6】

#### 心霊治療という現象に関する一考察

朽原篤(京都文教大学大学院 臨床心理学科博士後期課程)

われわれは、家族の死を予感したとか、霊を見たとか、憑いた狐を祓ったとかという話をしばしば耳にする。こういった“不思議な出来事”は、科学的合理主義的発想の下に迷信や偶然と片付けられがちであるが、それによって何か大切なことを見落としている気がする。本研究では、神道系新興宗教の信者で心霊治療者でもあるA氏(60才,女性)にインタビューして得られた出来事の中から1肺に水が溜まった男性2屋根の上を飛びまわる青年3叔父さんの骨という3つの出来事を取り上げ、その出来事について出来得る限り科学的・心理学的立場から考察することを基本にしながら、従来、科学的理解の及ばなかったものを考察しようとした。

考察の結果得られたのは、以下の4点である。1心霊治療とは何か?心霊治療は心霊で治るのかどうかはわからないが、相談者の深い無意識にある元型(C.G.Jung)に触れることで治療がされていると考えられそうである。その際、心理療法と違い心霊治療者は儀式を指示するが、その中で墓や祖先という日本人にとって心の深層にある元型に通じるイメージを使う。また、儀式をすること自体が、ひとつの元型であり、それによって心の深層に働きかけ、魂に触れる状況を作っているかもしれない。2心霊治療と心理療法の比較。心霊治療と心理療法の相違点として、前者は「対処策を指示する」が、後者は「主体性を尊重する」。また、前者は「特定の神話」を提供するが、後者は「個人の神話」を模索する。しかしながら、両者とも意味を感じ取りながら見守る見守り手がいて、共時現象が起こっている点では共通点も見られる。3霊感・霊視・直観についてイメージを感じるという側面から見た場合、宗教家の霊感・霊視・直観は、心理療法家の直観と同一線上にある感覚といえるかもしれない。霊感・霊視で感じるイメージが元型と触れるものであるなら、それはいわば「元型への共感」であり、心理療法家にも必要な能力として見直せないであろうか。4共時現象について。共時現象については今後の課題であるが、心霊治療家はその共時現象を予測しているかのように見える現象について考えて行きたい。

### 【研究発表7】

#### スピリチュアルヘルスとSOC(首尾一貫感覚)・本来感・フロー概念との関連

尾崎真奈美(京都大学大学院 人間環境学研究科)

サイコシンセシス理論を元に、既存の数種類のテストバッテリーを参照しながら新しい項目を加えて「スピリチュアルヘルス」尺度項目を提出した。大学院生、教官などからなる研究グループメンバー6名でその項目を整理したのち、学生10名に試行しながら改定を加え63項目からなるサイコシンセシス尺度を作成した。

学生(n=813,m=402,f=411)を対象にサイコシンセシス尺度を実施し、結果を探索的因子分析した。

結果は、この尺度の3因子構造を示した。順に、第1因子「意志」第2因子「喜び」第3因子「気づき」と命名した。サイコシンセシス尺度の、再テスト法による信頼性と内的整合性に関しては確認された。次に、因子分析から抽出した3因子より27項目からなる尺度を再構成し、SBAS-TESTと命名した。

学生を対象として、SBAS-TESTを、SOC(sense of coherence)尺度、本来感(authenticity)尺度、フロー(flow)体験チェックリストと平行試行し、「スピリチュアルヘルス」概念と各尺度、並びにその下位尺度で表される概念との関連を探索した。各4尺度の総得点、並びにその下位概念ごとの項目得点それぞれの関連に関してピアソンの相関係数を算出しt検定を行った。その結果、SBAS-TESTの総得点は、SOC尺度、本来感尺度、フロー体験チェックリストの各総得点とそれぞれ有意な相関を示した。また、SBAS-TESTの因子のうち、「意志」因子はSOC尺度総合得点、フロー体験チェックリスト総得点、本来感尺度総合得点と、「喜び」因子はSOC尺度総合得点とその下位概念である「理解可能感(comprehensibility)」、フロー体験チェックリスト総得点、本来感尺度総合得点との間に有意な相関が見出された。「気づき」因子は、フロー体験チェックリスト総得点のみと有意な相関を示した。

SBAS-TESTの並存的妥当性は、類似概念である4尺度各総得点との相関から確認できたと考えられる。SOC尺度と本来感尺度において、同様に見られた「意志」「喜び」因子との高い相関、「気づき」因子との無相関は、「意志」「喜び」因子を媒介として、SOC尺度、本来感尺度の両尺度で測定される概念に関連があることを示唆する。すなわち、ストレス対処の資源としてのSOCが本来感に関連する可能性を示す。その両概念とも「意志：普遍的原理に従って行動を選択する意志」「喜び：外的状況によらない内在的喜び」というスピリチュアルヘルスの側面に関連するが、「気づき：超越的次元への気づき」との関連は検出されなかった。これは、身体的・心理的健康生成論の中心概念としてのSOCとスピリチュアルヘルス領域の相違を示したと考えられる。フロー体験と「気づき」との関連は、フローにおける自我忘却側面の、スピリチュアルな体験への関連を示唆する。

## 【研究発表8】

### 自死遺族への心理的援助におけるスピリチュアルアプローチの必然性

吉野淳一（札幌医科大学保健医療学部看護学科）

#### はじめに

筆者が自死遺族の支援に携わるようになって10年以上が経過している。ここでは、これまでの筆者と自死遺族との個別あるいは集団での関わりから、自死遺族への心理的援助について常日頃感じていることを述べ、筆者の行っている自死遺族への心理的援助がスピリチュアルアプローチへと向かう必然性を確認したい。

#### 自死遺族の苦難の体験から生じる難問

身内を自死で亡くした遺族は、見捨てられ感や恥辱感、自責の念などを味わい、終わりのないなぜといった解けない謎を抱えて社会的偏見の中で生きている。その遺族と対面すると、その苦難の体験から生じた難問が筆者に投げかけられる。たとえば「〇〇はなぜ死ななければならなかったんでしょう」「私はもう生きてなんかいたくないんです、つらいけど生きなければいけないんですよ」「神は人に必要のない経験をさせないというなら、私にどういった意味でこの経験が必要なのでしょうか」といったような問いである。筆者はこれらの問いの前で、しばしばうぜんとする。「神の意図がわか

らない、とお考えなんですね」といったカウンセリングの基本的態度を貫くことはこの期に及んでも可能だが、しかしそれでよいのだろうか。自死遺族の難問を突きつけられるとき、筆者は遺族からカウンセラーの衣を捨てて素の自分で対峙することを要求されているような感覚に襲われる。

筆者が素の自分になって遺族に向き合うと、なぜか自死者とのあいだの関係を継続し発展させていくよう励ましていることが多い。それは自らの亡き家族とのあいだの実践を紹介しているに過ぎないのだ。しかし、あえて意味づければそこには自死で身体を失っても関係は終わっていないことを主張しておかないと、自死という事実が必要以上に縛られた遺族の現実が構成されてしまいかねないという危惧も存在する。

このように一人の人間として向き合うことが要求された筆者が持ち出したものは、死者とも共に生きているという現実に戻るとはなかったが、これによってこの世とあの世の境界を越えて自死者と遺族との関係を取り扱うことができている。つまり、筆者の経験した自死遺族への心理的援助の線上では、遺族からの難問によってカウンセラー的態度は行き詰まり、人間として向き合うなかで、私たちが単に物質的な存在であるだけでなく霊的な存在でもあることを前提にしたスピリチュアルなアプローチが見てとれるのである。

## 【研究発表 9】

### セラピューティック・ミュージック・ムーブメント アメリカの療法音楽活動における癒しの概念 — The Chalice of Repose Project の養成プログラムを中心として—

里村生英 (エリザベト音楽大学)

アメリカでは、1990年代の初期、音・音楽による癒しを実践するひとつの新しい活動が、従来の「音楽療法(ミュージック・セラピー)」とは一線を画する形で拡がり始めた。それは、「療法音楽(セラピューティック・ミュージック)」活動と呼ばれ、病床にある人や臨終を迎えつつある人など、ひとりの病人のベッドサイドで、その人のその時々状態にあわせて、療法的効果が期待される音楽を“処方”し、ハープや音楽を“生演奏”する、というものである。現在この活動は、先駆的な役割を果たしてきた実践者や研究者によって、それぞれ独自の養成プログラムが開設され、資格も付与されるなど、活動内容の充実と活動自体の世界中への拡がりの様相を見せている。

ところで、療法音楽活動の組織の一つである the Chalice of Repose Project(以下 CORP と略)は、この活動の先駆的役割を果たしてきており、30年以上前から、ターミナル臨床の場で、肉体のケアと魂の癒しのための Music Vigil: 音楽による看取り—終末期・臨死期の患者とその家族のベッドサイドで、処方したハープ音楽の生演奏と沈黙の祈りの提供を行う祭儀的な活動—を続けてきている。また、活動と平行して、音楽サナトロジストの資格を与える養成プログラム(ミュージック・サナトロジー 音楽死生学プログラム)を実施しているが、このプログラムではその土台として、つまり、療法活動実践のための実際的な知識と技術を修得する学びの前に、contemplative musicianship program が、義務づけられているところに特徴がある。CORP の指導者たちは、療法音楽士(ここでは音楽サナトロジスト)として、将来、患者のベッドサイドで、音・音楽を、癒しの術としてどのようにして使っていくかは、音・音楽を癒しの術として使う音楽サナトロジスト自身の“あり方・ものの見方・思考の仕方”が大きく作用することを主唱する。そして、ベッドサイドで終末期・臨死期の患者とその家族に、音楽を用いてケア奉仕をするためには、コンテンプラティブ(観想的)な態度が必須であるとしている。発表者は、この点に、音楽

がどのようにして癒しとなるかのヒントが隠されているのではないかと着目している。

以上のような見地から、本発表ではまず、療法的音楽活動の現在の動向について概観し、次に CORP の音楽サナトロジー実践の特徴について紹介する。そして、養成プログラムの contemplative musician-ship に焦点をあて、その意味の考察を通して、療法音楽の領域での「癒し」の概念について考察したい。

#### 【研究発表 10】

### がん患者のスピリチュアルペインの変容過程 —心理的支えとの関連から—

○小柳由美子・中村雅彦  
(愛媛大学大学院 教育学研究科)

近年、終末期癌患者の身体的、精神的苦痛の緩和のみならず、患者、家族の QOL 向上を目的とする緩和医療が、医療界に確かな位置を占めるようになってきた(村田,2004)。その中で、終末期患者が持つとされるスピリチュアルペインに対するスピリチュアルケアへの関心も高まっている(e.g., 村田,2004; 窪寺,2005)。スピリチュアルペインとは、人生を支えていた生きる意味や目的が、死や病の接近によって脅かされて経験する、全存在的苦痛のことである。特に、死の接近によって「わたし」意識がもっとも意識され、感情的、哲学的、宗教的問題が顕著になることを指している(窪寺,2004)。そしてこのようなスピリチュアルペインに対する援助がスピリチュアルケアである(e.g., 窪寺,2000)。我が国では、これらのことが取り上げられるようになったのは最近のことであり、スピリチュアルケアの学問的構築を目指し研究を進めている動きもあるが、一般的にはまだまだ浸透しているとは言えない。また、がん患者の心理過程についても、キューブラ・ロスの提唱するような死の受容プロセスとは一致しないと見解も多く、様々な見方が存在することが指摘されている(勝見,1996)。

そこで本研究では、市井の人々の語るスピリチュアリティ(広義の宗教意識)をとらえることを目的として、がん患者の大半が抱えるとされるスピリチュアルペインに着目する。すなわち、告知後からの心理過程を従来の直線的、段階的観点からではなく、ダイナミックに変容する可能性がある、との観点から捉える。その中で、スピリチュアルペインに変化が見られる時、1 何らかのきっかけにより気づきが得られ、2 心理的支えの状態が変化することにより起こる、というプロセスを想定して、心理的支えとの関連から分析する。心理的支えとは、自分がなにかによってなんらかの形で支えられていると感じていることを指し、対人的支え、内面的支え、宗教性による支え(Transpersonal Support)の三つの次元からなる(串崎,2001)。心理的支えの枠組みを導入することによって、スピリチュアリティの多様な側面を見ることができると考えられる。よって、告知後からの心理過程を振り返ってもらう中で、スピリチュアルペインと心理的支えの三次元の変容過程を分析することにより、その個人のスピリチュアルペインの変容に心理的支えがどのように影響しているかを患者との対話によって得られた語りから切り出すことが可能になる。

調査対象者はがん患者 5 名程度であり、実施手続きとしては Newman(1995)の意識の拡張プロセスに関する研究プロトコルを参考に、1 初回面接、2 転写、3 記述データの作成、4 作図、5 二次的面接、6 分析という手法を用いた。本発表では、得られた事例データについて報告し、スピリチュアリティ概念との関連で考察する。

## 【研究発表 11】

### 二つのスピリチュアリティとその政治的含意—気づきとつながり

堀江宗正 (聖心女子大学)

近年、日本ではトランスパーソナル心理学の内外で、スピリチュアリティ概念をめぐる議論が多数なされている。ここでは、それらを簡単にレビューする。その結果、「スピリチュアリティ」という言葉の曖昧さをそれとしておきながら、多様な解釈の余地を許容するような傾向があることを確認する。その上で、その内容について、二つの異なる要素を取り出すことができそうであるということを目指し指摘する。論者によって呼び名は異なるが、それは、「個人志向 / 関係志向」「自己志向 / 他者志向」「垂直的 / 水平的」「気づき / つながり」などの対比としてまとめられる。

個人的スピリチュアリティは、個人の気づきを中心として追求される宗教性であり、特定の民族や宗教の利害関心を超えた人類レベルでの意識の進化を志向するが、具体的な運動に結びつかず、セラピーやワークショップへの参加や、スピリチュアル関連商品の消費に終わる可能性がある。その結果、新自由主義に都合の良いライフスタイルに行き着き、競争主義、消費主義、アトミズムなどを支持する隠れたイデオロギーになりかねない。それは、スピリチュアリティが本来的には目指していた《弱者のケアと環境へのケアを通してのつながりの構築》という理念を損なうことになる。

関係的スピリチュアリティは、そのような個人を超えたつながりの構築を目指しつつ、全体に配慮しながら排除される他者をケアするものである。具体的に、環境運動、人道的活動、医療・看護における実践、特定宗教に偏らない環境倫理・生命倫理の分野における合意形成、教育的実践などでの展開が見られる。しかしながら、それは普遍主義に傾き、明確なスローガンを掲げ、ガイドライン作りを目指す過程で、スピリチュアリティの内容を固定化し、場合によっては全体を優先するあまり、個別でローカルで土着的なスピリチュアリティを抑圧する危険もある。グローバルの名のもとには特定の価値観が忍ばされているかもしれない。

これら二つのスピリチュアリティは、表面的には正反対の政治的スタンスを取るが、理念的には統合可能なものである。それは、ある種の循環関係、または二つの焦点を持ち、それに引きよせられながら運動する楕円モデルを構成するであろう。すなわち、個人的スピリチュアリティが、アトミズム的な個人主義と競争主義と消費主義に偏ったときには、関係的スピリチュアリティがバランスをとり、関係的スピリチュアリティが普遍主義的で全体主義的な様相を呈したときには、個人的スピリチュアリティがバランスをとる、ということである。

スピリチュアリティに関わる研究者に求められているのは、それぞれの陥穽に熟知し、それを警戒すると同時に、両者に潜在する批判的契機に目を凝らし、それによってカウンターバランスをとるような研究的実践であるだろう。

## 特別シンポジウム 「東西思想の根源にあるもの」

司会 合田秀行（日本大学）

### 仏教とキリスト教

ウイリアム・ジョンストン

（上智大学名誉教授・イエズス会司祭）

私には、諸宗教の邂逅は、瞑想や祈りのレベルで行わなければならないことが、ますます明白になってきています。その理由の一つは、今日、我々が望んでいることは、世界の平和であると認識するようになったということです。我々は、諸宗教間の一致と協力によってのみ、この貧窮する世界を破滅から救うことができると分かっているからです。

第二の理由は、今日、人々はほとんど宗教的な教えに興味を示さなくなってきているのですが、瞑想には強い関心を示しています。神を信じない人々でさえ瞑想をしたいと思っているのです。我々自身、学びながら、かつて汎神論的といわれていましたが、現在では神秘主義的と呼ばれる体験を通し、我々の存在の底に神を見出せるように人々に教えなければならないのです。

それ故、キリスト教徒の祈りと瞑想、特に私自身の祈りについて、仏教徒の瞑想から学んでいること、また、キリスト教徒が仏教徒に提供できるかもしれないものを説明し、話すことに決めました。私自身の祈りに関しては、正式な瞑想は青年期にイエズス会の志願者になったときに始まりました。その頃、私は思考と推論によって瞑想することを教えられました。これは推論的な瞑想と呼ばれ、魂の三つの力—記憶、理解力、意思—を使います。

この推論的な瞑想は、最初、大変私に役立ちました。しかし、最終的に私の祈りは単純化され、マントラのように「イエズスよ、私を憐れみ給え」とか「聖霊、来てください」などを唱え始めました。このマントラを唱えていると考えたなくなり、一方、ただ在るだけ、そしてマントラがマントラさせるようになりました。この種の瞑想を通し、私の小我よりも、もっと深いところにある私の真の自己に気づきはじめました。時がたつにつれ、言葉のない深い沈黙の中に自分が入るのに気づきました。ただ存在の感覚があるのです。これは観想的な祈りです。私はイエズス会員のジョセフ・デ・ギルベルト、ドミニコ会員のレジナルド・ガリゴウ・ラグランジのような（彼らを神秘主義者と呼べるか？）霊的な著者の著述を読み始めました。彼らは、「習得的な瞑想」と「注賜的な瞑想」を区別しません。前者は自分の努力によって得られる内的沈黙を意味します。後者においては、沈黙は賜物（ギフト）であることを意味します。私は自分の努力ではそれを獲得できませんでした。

これらのことは、1940年代の後半、アイルランドでの若い哲学の学生であった時のことです。それから、かなりたって、私は日本において十字架の聖ヨハネと『不可知の雲』を読んだのです。そして、これらの著者たちは暗夜を私に教えてくれました。あのカルカッタのマザー・テレサがそれほどまで生々しく描いた「苦悩」。しかし、私の暗夜においてさえ、私はこの暗夜が浄化と大きな喜びを含むことを知りました。私は常に聖パウロの言葉、「常に、神において喜べ、そしてまた言う。喜べ」を大切にしてきました。

さて仏教についてですが、私がまだアイルランドにいる間に、ドイツ人のイエズス会員のヒューゴ・愛宮・ラサール師によって禅を紹介されました。師は仏教を言葉を超えた神秘主義的な智慧に人々を導く、神秘的な深い宗教と観ていました。日本のイエズス会の上長であったラサール師は、仏教との

対話を通して、キリスト教徒が失おうとしている危険にある神秘主義を、キリスト教徒が再び取り戻す助けになると考えていました。

悟りを仏教の最高点とみなす人がいる一方、他の人々は真の仏教はいかなる悟りの体験をも超えて、無の体験、または空の体験まで達すると主張します。私はラサール師が悟りを体験したと聞いていません。そして師が神への道において執拗に無、無、無と復唱した十字架の聖ヨハネの“ナダ”または“無”と似たような究極的な“無”の体験をしていると聞いていません。

しかし、私が仏教に根ざしている日本文化について最も興味を引かれたものは、漢字で“気”と書きますが、気として日本人に知られているエネルギーを非常に強調することです。このエネルギーは身体中を流れ、そして悟りへと導きます。しかし、一般に気をコントロールすることを学ばなければなりません。すると、エネルギーはリズムカルに身体中を流れます。深い呼吸によって、またマントラの再唱によって、また禅の多くの技法によってコントロールすることを学びます。しかし、“気”のコントロールは日本文化の中にどこにでも見出せると信じています。

さらに、この“気”は宇宙的で、全宇宙の中を流れ、我々はそれを取り入れるのを学ぶべきです。ヒンズー教徒がクンダリーニと呼ぶものに由来していると思います。人間すべてに現存しているのですが、多くの人の中で眠っており、しかし一端霊的实践によって目覚めると身体中を流れるようにでき、そして大きな霊的体験に導かれるのです。このクンダリーニについて読んだことが、私の人生の最大の危機にあった時、私は助けられたと思っています。クンダリーニの知識とその役割を知るとは、西欧の霊性が非常に必要としているまさにその何かと言えます。

これまでに述べたように、このエネルギーは宇宙的に存在し、動植物の中にも活発に働いていると思います。しかし、人間において、それは特別に霊的な役割を持ちえるのです。私は人間の性能力が霊的体験において果たすことができる役割に表れていると考えています。カトリックの法は司祭職を望む人たちに終身独身性を要求します。仏教には、独身の僧侶がおり、しかもその独身性はカトリック教会のそれとは違い、自発的なものであり、このような生活に呼ばれていると感じている人々です。この点において、カトリック教会は今、仏教から学び始めています。エネルギーの学習と仏教の気と対話することにより、ある人々にはどのように肉体的性能力が変容されるか、分かるようになるかもしれません。

これまで、未来の世界の最大の出来事のひとつであるだろう仏教とキリスト教の間の対話について少しヒントを提案してきました。将来に向けての対話に皆様の意見や提案を大いに期待しております。(シンポジウムでは、ジョンストン神父は日本語で話されますが、抄録は英文で頂きました。丸山展生氏訳 / 合田秀行一部修正)

**【略歴】** ウイリアム・ジョンストン (William Johnston) 1925年、ベルファースト (アイルランド) で生まれる。18歳でイエズス会入会。アイルランド国立大学でローマ・ギリシャ古代史の学士号取得 (首席)。聖スタニスロウズ大学 (イエズス会哲学院) にて哲学修士号取得。26歳で、来日、現在に至る。聖イグナチオ教会にて土井枢機卿より叙階される。上智大学にて、神学博士号取得 (博士論文『不可知の雲』)。上智大学教授、東洋宗教研研究所所長を歴任。

著作 “The Mysticism of ‘Cloud of Unknowing’ (1978)” “The Still Point: Reflection on Zen and Christian Mysticism (1970)” “Christian Zen (1971)” “Silent Music: The Science of Mysticism (1974)” “The Inner Eye of Love: Mysticism & Religion (1978)” “The Mirror Mind (1981)” “The Wounded Stag (1984)” “Being in Love: The practice of Christian Prayer (1988)” Letters to Contemplatives (1991)” “Mystical Theology: The science of Love (1995)” “Arise, My Love (2000)” “Mystical Journey: An Autobiography (2006)”



翻訳“Silence (1969、遠藤周作『沈黙』)”ほか。

## 空海・プロティノス・エックハルトに見る自己変容の道

小田川方子 (麗澤大学名誉教授)

このシンポジウムの統一テーマの解明には、仏教的・ギリシア的・キリスト教的な神秘思想をそれぞれ代表する空海・プロティノス・エックハルトの思索の理解が有意義と思われる。神秘思想は、究極的な原理ないし根源と自己との合一を目指すものであり、最終的に、純粋化された本来的な人間が、普遍的に経験しうるであろう新たな次元の世界を開示する。そこに到る過程は、<自己変容の道>と呼べるであろう。

私は、これら三者の異同を、主として「否定」と「肯定」という言語表現の形式に従って辿ってみたい。最初の歩みは、三者に共通して、心ないし魂自身による現象界に埋没した生き方の「否定」である。それは、外的感覚世界の影響からの脱却によって、より高い段階としての、内的自己への転換に到る。ここでは、自我への執着がある程度取り除かれ、よりよく生きようという決断がなされる。

この段階からより高い段階への移行は、三者それぞれにおいて異なっている。プロティノスにとって、それは魂の神的「ヌース」(叡智)への上昇であり、それは魂のみずからへの精神集中によってなされる。それに対してエックハルトでは、移行はまず、魂による自己自身の強い「否定」によって、みずからの存在の最初の瞬間への帰還、「突破」、を目指してなされる。この徹底した否定の基礎の上に、「魂における神の子の誕生」という「肯定」が顕現する。空海における心は、瞑想による心の実相についての智慧の獲得の点では、プロティノスの魂のヌースへの上昇に対応し、空海における自我および一切の観念の否定、「空」も、ヌースの普遍的な次元に通じるものであるが、同時に、エックハルトの徹底的な否定にも対応している。エックハルトの「神の子の誕生」という肯定は、空海における心の本性が仏にほかならないという自覚に通じている。

自己変容の最終段階は、プロティノスとエックハルトにおいては、言語を超えた完全な「否定」であるが、空海では、それとは反対に「肯定」のみとなる。この相違をもたらす根拠のひとつとして、空海の「身・語・意」の意味を明らかにしたい。

【略歴】小田川方子 (おたがわ・まさこ) 東京大学教養部教養学科卒業。同大学院人文科学研究科修了。(独) ヴェルツブルク大学哲学科博士課程修了。Dr.phil.(哲学博士)。比較思想学会理事。著書『生と知の根源—比較思想論集』(理想社)、共編著『生と死の深み』『癒しの思想』(ともに麗澤大学出版会)

## 祈りから見た「人間存在」— 無限と有限の関係として—

柵次正和 (京都府立医科大学教授)

本テーマ「東西思想の根源にあるもの」は、洋の東西を問わず、人間存在に関して普遍妥当性を有する事柄を根源的に探究しようとするものである。そこで、普遍的な宗教現象の一つと考えられる「祈り」に着目して、その祈りから「人間存在」がどのように見えるか尋ねてみたいと思う。

日本語の「いのり」と西欧語の prayer, priere, Gebet などとの間には、意味上で大きな差異がある。「いのり」は、そもそも何であり、何でないのか、この点を語源の考察から明らかにしておく必要がある。また、「祈り」の基本性格を浮き彫りにするために、導きの糸を二つ用意したい。一つは「祈りは人間の自然本性に基づく行為・状態である」ということ、もう一つは「祈りは宗教経験の原点をなす」ということである。この二つの導きの糸によって、「祈ること」は「生きること」、それも生命を根源から「生きること」であることが分かるだろう。祈りは特殊な人たちの特殊な行為などではなく、鳥が空を飛び、魚が水中を泳ぐように、人間が自然本性として行う行為であり、またその状態なのである。このような「祈り」には、自我と言葉を目印にするならば、三つの類型が想定できる。自我がその人格的陶冶・完成を目指して人格的超越者(神仏)との対話へと向かう「有の祈り」、自我がその欲望や執着を放棄し言葉を捨てながら、無我・無心の極へと打ち沈む「無の祈り」、そして自我や言葉が通常の境位よりもさらに内奥から破られて、生命本然の響きが根源から開かれる「本然のいのり」である。現実のどの祈りにも、程度の差はあれ、この三つの祈りの局面が同時に含まれていると推察される。

では、人間存在を「祈り」から眺めた場合、どのような構造が見えてくるだろうか。さきほどの目印の一つ「自我」を基軸にすると、自我が向かっていく方向の極には人格的超越者が、また自我が捨てられていく方向の極には無我が現われてくる。有の祈りによって人格的超越者に出会う「自我」、無の祈りがそこへと打ち捨てられていく「無我」、本然のいのりとして響きわたる「真我」、これらの三者関係を下敷きにして人間の存在構造を透かしてみると、実在界と現象界の双方に跨がっている人間存在の不思議が浮かび上がってくる。不生不滅の「真我」、生滅する「自我」、自我(我執)が捨てられる「無我」に現成する真我、この三者関係は、自己論の観点から二重自己(あるいは三重自己)として究明できるものと思うが、それはまた同時に「無限と有限の関係」としても読み解くことができるものだろう。「真我と自我」の関係を考察する際には、「役者と役柄」の比喻を援用するのが有効と思われる。

【略歴】 棚次正和(たなつぐ・まさかず) 京都大学文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科博士課程(宗教学専攻)修了。筑波大学教授(哲学・思想学系)を経て、現在、京都府立医科大学教授(人文・社会科学教室)。博士(文学)京都大学。日本宗教学会理事。宗教倫理学会評議員。著書『宗教の根源—祈りの人間論序説』(世界思想社)、『宗教の哲学』(創言社)、編著『宗教学入門』(ミネルヴァ書房)ほか。



